

作庭実習「森をつくる」10

環境共生園について (4)

岩村 伸一¹⁾

Seminar in Garden Design, “Creating a Forest” 10 : On Kyoseien Garden (4)

Shinichi IWAMURA

抄録：京都教育大学の美術科で開講されている『作庭実習』は、作庭を通して森をつくるということをテーマにしています。参加者は、体を使って空間を変えることに取り組みました。2009年度は附属環境教育実践センター環境共生園での作業も大詰めです。今回は大学全体の植栽計画についてもふれています。

キーワード：環境共生園，庭，森，教育，植栽計画

もう一度、わたしの記憶の中にある高知駅の北、炭滓広場周辺^(註1)から話を始めます。

操車場から蓮田の間は、市営住宅として、平屋のいわゆる二戸一住宅群が広がっていました。防腐処理した杉板で壁を覆われた建物が、間隔をあけてゆったりと並んでおり、現在の住宅地に比べたら、ずいぶん落ち着いた色合いの町並みで、住人それぞれの生活とかかわる庭の木々が区切られることなく伸びやかに連なり、路上で遊ぶ子どもたちからも、ダリアやグラジオラス、カンナなどを縁越しに眺めているその姿が観察される…。いつの間にか失われてしまったように思える、くつろぎの感じられる景色でありました。

犬を連れてたひとりの老人を思い出します。上背のある、手足の長い、痩せてはいるが骨格のしっかりとした印象の体躯、きちんと手入れした白髪をはりつけた比較的小さな頭部、浅黒い肌にはっきりとしたつくりの目鼻。当時人気の時代劇俳優、大友柳太朗を思わせる風貌でありました。四六時中このあたりの路上で遊びに熱中しているのですから、犬に散歩をさせる住人には多く出会うのですが、そのひとりひとりを憶えるということはあまりないものです。しかも、長い間記憶の下の層にあって浮上してきたものですから、ずいぶんと怪しい像だと言わねばなりません。が、枕木の柵の間より転がり出て、群青色の魔人から逃れてきたときも、その、犬を連れて大きな背中に出くわしました。振り向いたその大きな目がわれわれを認めると、丹下左膳や倉田典膳よろしく、カッと笑ったのです。この人がS先生であるということを知るのは、もう少し後、市街地にある私立中学校に進学してからの英語の授業のときでした。教卓越

1) 京都教育大学

しにいつもの笑顔で、オヤというふうに向けられました。

「リピート、リピート、リピート、アゲイン」というのが、先生が授業中何度も使われた言葉でした。繰り返し巻き返し憶えること以外に英語上達の近道は無いという旨であると解釈しました。教壇での明快で毅然とした、迫力のあるその姿に比べて、あまりに地味な言葉であったのでしょうか、生意気にも世知に辛くなりはじめた少年たちには響きがない言葉であったように思えます。

ある日の授業時のこと、指名を受けたひとりの生徒が、予習をしていないと返事し解答をしませんでした。次の生徒も、次の生徒も、その次の生徒も同様に答えます。さすがの先生も少し呆れ顔をされました。妙な空気になったなと少し他人事の体で横の方にいたのですが、「リピート、リピート…」と唱えながら不意にこちらを向かれて「じゃ、岩村」。とっさに聞こえたのは「やっていません」というわたしの声による返事。「しまった!」。笑いかけた先生の顔がこわばるのを見ました。時間が止まった、こんなにゆっくりとした時間の進行があったのかと思うほどで、自分の顔は真っ赤になり、引き攣っていたのではないかと思います。彼は何も言いませんでした。いつものように笑顔に向けられました。落胆がわたしに伝わったのはいうまでもありません。ほぼ何も考えず発した一言が、不意を突きました。わたしが引鉄を引いたのです。そう感じ、立ち尽くすしかありませんでした。

この出来事を思い出したのは、実は最近のこと、大学の教員になって学生と接するようになってからです。何がきっかけになったのかははっきりしませんが、突然、頭をもたげました。はじめはボンヤリしていたのですが、教師を続けるにつれますます明瞭になってきます。記憶の深いところに、わたしに向けられたその時のS先生の表情を隠していたわけで、中学時代のわたしは必死で忘れようとしたのだと思います。そのことについて考えることをやめ、日常の細部に拘りながら、判断を後ろ伸ばしにして、とうとう忘れたのでしょうか。長い間、S先生に関する一切のことを意識の表面から追いやっていたのです。

わたしの中学在籍中に先生は退職されました。生徒全員を前にした最後のお話も、いつものようにいつもの言葉を述べられ簡潔に終えられたことを思い出します。おそらく当時は漠然と聞くことしかできなかったのでしょうか。しかし今になるとはっきりと伝わってくる。そこで示されたリピートすべきことは、英語修得のことだけ、いや、英語のことを指しているのではなかった。先生のそれまでのなんらかの経験を背景にした、先生の決意であり、姿そのものであったのだと、考えることができます。S先生は何も語らずにわたしに伝えられたのだと理解します。

昔話が長くなり、前置きとしては用を成さなくなりそうです。環境共生園に焦点を当てなおさなければなりません。

2009年3月7日、土曜日の午後、京都教育大学附属環境教育実践センター主催で、『場所から学ぶ一環境教育実践センターをキーステーションとして一』をテーマに、公開シンポジウムが開催されています。

前半はセンター講義室を会場にして、講演者は山内朋樹（京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程）、野澤良太（京都教育大学大学院教育学研究科理科教育専修）、鍋島恵美（京都教育大学附属幼稚園副園長）、種田 仁（京都市立呉竹総合支援学校教諭）の4氏で、それぞれ「場

所、あるいは持続する環境の論理」「学校ビオトープの有効活用と維持管理方法について」「環境教育実践センターをフィールドとしての学び」「地域に学ぶ—環境教育実践センターとの連携」を題目に20分ずつの発表がありました。山内氏（この一連の報告でもたびたび登場してくれる山内君です。）は制作に携わった立場から「環境の論理」を切り口にして環境共生園のあり方を述べています。野澤氏は理科教育における学校ビオトープを通じて共生園の先行きを示してくれました。鍋島氏は1年を通した幼稚園児の活動を報告しつつ環境センターの意義を述べられ、種田氏は地域資源を活用する観点からリサイクルシステムを介した環境センターと連携した活動を報告されました。発表者それぞれの立ち位置がはっきり感じられ、それが絡み合った興味深い内容で、環境教育実践センターにとって意味のあるものであったと思います。時間の短さを残念に感じました。

後半は会場を屋外に移し、晴天の少し肌寒い日ではありましたが、環境共生園（森）、栽培学習園（農場）、環境教育有機物リサイクルシステム棟に実際に立って、それぞれの場所で活発に質疑・討論することができました。この日の様子は環境センターから2009年3月31日に発行された報告書^(註2)にまとめられています。参照していただけたらと思います。

このシンポジウムは環境教育実践センターのこれからを考えることを第一の目的として企画されました。企画者は環境センター長梁川正、理学科坂東忠司、美術科岩村伸一の3名です。京都教育大学は教員養成系大学であるというその使命を全うするとして、平成18年度改組により、教育学部の入学定数300をすべて学校教育教員養成課程に割り当て、それまであった総合科学課程の募集を停止しました。その結果、総合科学課程環境コース学生の主たる研究の中心でもあった当センターは、今後も本学の教員養成の環境教育実践を担うことには変わりはないのですが、大きく変わらざるを得なくなりました。大学の7附属学校園や近隣の公立学校等との連携を通して、今後のあり方を模索する場としてのシンポジウムであったのです。が、同時にもうひとつの意味をわたしは企画者の一人として込めました。

環境共生園造園のスタートともなったシンポジウム『環境共生園をキーステーションにして—環境教育を学習から日常活動へ—』^(註3)は1999年3月6日土曜日に開催されていますから、ちょうど10年が経っています。幸い、環境共生園の庭として予定していた造作は南端に達し、敷地全域を覆ってほぼ完了したと考えていた折でもあったので、いつまでもひとりで草藪の内でごそごそと楽しんでいるのではなく、こらで一区切りをつけて、共生園ができあがっていますよと周りの人に告げなかったのです。いや、そうすることで区切りをつけようとしたのかもしれませんが。違う言い方をすると、『環境共生園について(2)』の結びとした「この環境共生園はもともと附属学校も含めた大学全体の環境教育の実践の場として構想されたものであることは、既に述べたとおりです。とすれば、この森との関わりで成立していく教育とは、どういうふうにとらえることになるのでしょうか、どういうものとして可能になるのでしょうか。」^(註4)を考えることが、今回のシンポジウムのもうひとつの目的でもあった訳です。



ところが、そうやって肩から荷を下ろそうと目論んでもう一度この場を見渡すと、不十分なところがいくつも目に飛び込んでくる。そのあたりが元植木屋の性なのかもしれません。2009年度の作庭実習もやはりこの環境共生園を舞台としました。

今回の受講生は9名でした。先ほど述べた平成18年度改組の影響で、元々総合科学課程造形表現専攻の課程表に位置付けられていたこの作庭実習を選択する学生も徐々に減ってくるだろうと予想していますが、今年もなんとか授業のかたちを確保することができると安堵しました。このことで、今回も技術指導を作庭家の古川三盛氏に依頼することができます。加えて、前年度の受講生の自主的な参加や、興味を持ってくれた大学院生や教員研修留学生の飛び入りもあって、その日の天候等による多少の変動はありますが、毎回10数名の作業者がいました。経験者が多く参加している授業形態はこの作庭実習の特徴ではないでしょうか。教員が教室でいちからすべてを伝えた後に現場に入るとなると、具体的な作業以前に随分時間を使ってしまうでしょう。が、このかたちだと最小限の指示のもとに体を使った仕事に移れます。いろいろな方法でその作業に必要な事柄が初めての人にも伝わるのです。このことに甘えてはいかんですが、わたしも古川氏もどうしようかと迷っている学生に対して「やってみたらいいよ。」と楽天的とも取れる返答をすることが癖になっているようです。作業同士でコミュニケーションをとってイメージを共有していくことが、この環境共生園の作成にはとても大切なことだと考えていることの証でしょうか。それも、この方法による結果がこの森の良さとして、すぐそこに見えているからだと思います。

2009年度の環境共生園での実習も例によって手による草引きから始まりました。作業に体を慣らしていくというのがその主な理由^(註5)なのですが、草に触ることを通じて環境共生園の土や空気を体で感じ直接知ることを期待してのことでもあります。この馴染む感覚が無けれ

ば、この場所で何かの制作に取り組むとして対象をイメージしようとしても、その図像に背景がないということになりかねません。それでも草との格闘ばかりが実習の内容になってしまっただけでは、やはり授業としての体をなさない。それに、これまでの後期授業期間内の草刈りの時期では、草の種があらかた地面に落ちてからの除草になってしまい意味が無いということを例年の繁茂から痛感したこともあります。しかしなによりも、この場所が地域に少しずつ認知されつつあり、これからのこの地の活用を視野に入れたとき、1年のかかりの期間、雑草に覆い尽くされて人を寄せつけないという有様では、少し問題があると考えようにもなりました。2009年は6月中頃と10月初めにOBによる作庭グループ『培土園』に依頼し、あらかじめ草を刈ってもらいました。それにより授業での負担も軽減できるかと思ったのです。が、実際は作業日誌で振り返ると3回6コマ以上を草刈りに費やしています。にもかかわらず全体の除草は完了せず、池を予定している部分の西側の山頂部はそのままスキが暴れています。ま、これはこれで風情があるかなどと負け惜しみのようなことを口走ってしまいました。

さて、この年度の実習の中心課題は、野筋の完成です。この野筋を確定する作業は、実際の庭造りの現場では大変重要な仕事です。それに無理があればいつまでもその庭はギクシャクとしたままです。そもそも、その庭の雰囲気を生み出すのは、どんな樹木が植えられ石組が据えられようと、この地形の表面なのです。草を取り払ってみると昨年度行った整地で完了したと思っていたこの敷地の南端部分、裏山のアカマツ林周辺の地形にいくつかの問題が見つかりました。

ひとつは、アカマツ林の東側斜面一帯が予想以上にくぼみ、水が溜まるようになってしまっているという点。この部分は昨年度末時間の無い中で最後に手を入れたところでした。その時の整地作業が甘く、入れた真砂土が締まる以前にレーキで均してしまったようです。この修復は簡単です。一輪車で何杯かの真砂土を運び込み、降った雨が溜まることなく地形の裾まで流れるように低くなった地面をかさ上げします。その後、周囲にもいくらかの土を加え、水の流れていく方向を再度確保しながら自然に感じられるなだらかな起伏を回復します。このとき、全体の地形との調和を図ることが重要です。

もうひとつはちょっと深刻でした。アカマツ林西側の斜面の土が旧消防学校（消防学校は移転し、2009年4月からは京都大学の施設になっている。）側へ崩れ落ちています。環境共生園敷地はその前は公務員宿舎が立ち並んでいたことは以前の報告でふれた^(註6)ことですが、隣の消防学校との境は比較的簡単なブロック塀で仕切られていました。この辺りの地域一帯が、北から南へ向けたゆるやかな下り勾配を持っているため、塀も傾斜しており、その内側に沿って設えられた宿舎の排水用の溝もゆるく南へ下って流れていました。共生園の造園においては、当然この塀に手を加えることはできません。初期に着手した北側部分は元からの地形を活かしてそのままブロックに地面を当てて問題は無かったのですが、池を掘り下げその土を西側に盛り上げた辺りから南は、野筋の裾をブロック塀に直接当てることは難しくなりました。基礎を地中に広げたしっかりした壁を築かないかぎり、土の圧力で塀を向こう側に押し倒してしまう恐れがあるからです。従ってブロック塀に向かって盛り土の向こう側の斜面は見た目以上に下がっています。アカマツ林のある南端に来ると、その傾斜はかなり大きなものになります。しかも、この辺りでは塀沿いの排水溝を残しそのまま共生園の排水に利用していますから、アカ

マツの植わっている地面と溝との落差はかなりのものになっています。一番頂上に植えてある松のすぐ西に据えてあったおむすびのような石が毎年動かされています。去年は子どもの悪戯だろうと思い、据え直して見ごしたのですが、今年も動いている。どうやら雨に周囲の突き固めた土を流されて動いてしまったようです。これでは、いつ松の根元も洗われて根がむき出しになるかわからない。根本的な対処が必要だと判断しました。落差をすべて土の斜面にするのではなく、下の方からいくつかの石を組み上げて、石垣ほどではないにしても土を堰きとめる工夫をしなくてはなりません。そうやってもっと多くの土を入れ、そうすることで土の部分の傾斜をゆるやかにし、この辺りの地面を安定させることが可能になるでしょう。



頭では簡単な工事なのですが、今年受講者にとっては大変厄介な作業です。いや昨年以前の受講者にとっても同じでしょう。毎回の参加者を、石を据えていく班と石や土を運ぶ班の二手に分け、腰をすえて作業に取り組むことにしました。足場の悪い、しかも狭い斜面で、ツルハシ、スコップや突き棒を操ってつぎつぎと石を固定していくのは、不慣れな者にはなかなか難しい、体力と根気の要る仕事でした。足下のはっきりしないところで丸太とロープを使い、ふたり一組で息を合わせて大きな石を次々と長距離運ぶのも同様でした。日誌によると11月の中頃から12月の中頃まで、4回8コマを使って作業を継続しています。肌寒い日もあった

のですが、それがちょうど良いくらい汗をかいたのではないかと思います。12月の最後には、高さ60cmで長さ15mくらいの土留めが完成します。ざっくりとした粗い姿ですがこれで充分機能するでしょう。野筋の整地にも一段と力が入りました。

作庭実習の内容には直接関連はしないのですが、ひとつ追加しておきます。この年の共生園での作業ということでは、豆と蕎麦のことを記しておかなくてはなりません。数年前の時点で池の南側に3段の段々畑の造作を完成させたのに、それは形だけの畑のようなものでしかありませんでした。これではつまらんということで、5月に何人かの学生と上2つの畑の草を引き、鋤を使って畝を作り、丹波黒豆の種を丁寧に植えました。いくつか双葉が顔を出し、若干収穫に期待を持たせましたが、いつの間にか夏草の勢いに飲み込まれ、気付いたときには葉と枝ばかりが爪先立ちをしているかのように立ち枯れていました。完敗です。もう一度9月のはじめ、まだ暑い日ざしの下で2段目の草を刈り、今度は蕎麦の種をばら蒔いて放置しました。これは一斉に新芽を出し、伸び上がって小さな花をつけました。一帯の緑のジャングルを背景に花の白が眩しく広がって、思わぬ気持ちのよさに、何度も写真に記録しています。夏の失敗もあったし、少し種蒔きが遅かったこともあり、あまり期待は寄せませんでしたが、11月の終わりには摘み取りをしています。結局、使った種より貧弱な実が、蒔いた分量と同じくらい取れました。それでも収穫であることにかわりはありません。これでこれまでの畑モドキは、立派な畑としての一步を踏み出したという次第。



環境共生園の基礎となる造園工事は、これで大方完了です。年々の草刈りや必要な補修は行わねばなりませんが、今後しばらくは骨組みには手を出さず、見ることに専念しようと思っています。いくらもしない内に、生々しい工事跡は馴染んで落ち着いてくる。そうやって、庭は

一応の完成を見ます。が、その完成というのは固定したひとつの像を指しているのではありません。当然、庭は変化し続けます。木々は生長します。年毎の手入れを経て、その都度新しい姿を見せることになります。そのうち、植えた苗がひとかどの樹木になって剪定を必要とする日が来るはずで。庭であれば、ここは作庭家の腕の見せ所でしょうが、ここではもう少し我慢して、見続けたいと考えています。木々が勢いを増して立ち上がり、伸び上がって、全体でひとつのかたまりとして立ちふさがり、圧力を感じさせる…。時が許す自然の力です。それを忘れてはなりません。周囲の人々の快適を想定した庭としての場所をではなく、わたしたちは森をつくることを目指したのです。こうなってはじめて、「この森」に分け入ることが可能になります。もう一度この新たな森と関係を切り結ぶことになるでしょう。

武蔵野 實氏は、滋賀大学環境総合研究センターの研究年報へ寄せた論文『京都教育大学野外博物館—オープン・エア・ミュージアム—』において、この環境共生園の造成について次のように報告しています。「…学生たちと共に自然の森にするための整地をはじめたところだ。ブナの苗木なども植えられ一部は根付けに成功している。学内では生物分野の教員と共同作業を進めているが、行く行くは他分野の教員とくに環境関連の人文系教員の参加を得、学生ボランティアと共に、手作りで、自然を作ろうとしている。」と紹介し、続けて「…構想では少なくとも 20 年にかかるとしており、卒業生が戻ってきたときにも、変わりつつ復元されていく自然の森を見ることが出来るだろう…」。^(註7) たずねられたときとっさに「10、いや 20 年」と答えたのを思い出します。それは単純に、工期としての 10 年に生長期間としての 10 年を加えたものだったのです。これまではなんとか予定通りの工程と言えますが、後の 10 年は全くの当てずっぽうであって、この土地と周囲が持つ様々な力に左右されるでしょう。今回 2009 年度の作庭実習で着手した辺りであると、10 年では少し短いように思われたりします。今述べた「様々な力」を、人や社会の考え方や感じ方も含めて、おそらく環境と呼ぶのだと思います。わたしの子ども時代でも街中で森を育む環境はいたるところにありました。鎮守の森や城跡の木々を連想しなくても、いつも走り回っていた近所を思い起こすだけでその背景にいくつもの黒々とした木々が浮かびます。しかし、樹木をジャマなものとし、落ち葉を汚いゴミとしてしか扱えない社会の傾向が急速に幅を利かすようになって、森は姿を消しています。子どもどもの鎮守の森は駐車場です。もう少ししたら、木々だけではなくわたしたちにも生きづらい、薄い環境になってしまうのではないかと恐れます。

将来、「この森」の変化を、そのあたりまでは、なんとかこの眼で確認することができるかもしれません。しかし、なんでこんな所に鬱蒼とした繁みがあるのだろうと人々がいぶかしがる頃となれば、今の事情や状態を知る者のほとんどは、もういない。木と人間の関係は、実にこういう、まったくスケールの違う時間を介しての、現在の上にあるということなのです。わたしたちの掲げた「森をつくる」という森は、いまだ想定森であります。わたしたちのつくった環境共生園は、目の前に展開する荒地のような庭にすぎません。

ところで、「この森との関わりで成立していく教育」を考えることが、シンポジウムの目的でもあったと述べました。当然ながら環境共生園の造成を引き受けた頃には、そのことについて考えをめぐらせたことは幾度もあるのです。今回のシンポジウムでもなんらかの表明をする

べきではあったと思っています。しかし、共生園での作業に関わるにつれ、どんどん解らなくなってきました。その辺りはこの一連の報告の中でも、様々な表現に込めてちりばめてあります。

「私たちはこの場所に足を踏み入れる度に、この空間に新しい意味を与え、その都度、森を組み立て直してきたのです。私たちはこの空き地で遊んでいたのです。」「ひとりひとりの思いを持って、自分から分け入っていくことのできる、ニュートラルな空間が成立していなくてはなりません。この場所には、いつまでも「訳のわからん」空間であり続けて欲しいと願います。」^(註8)

「共生園の成立にとってこの多様性は重要であると考えています。ひとつの場がいくつもの思いを同時に立ち上げ成り立たせている。その中で様々な意味が生まれ消えていく…。」「わたしたちの「森をつくる」においてもひとつの観点から見続けることはおそらく不可能です。多様な価値を導き入れなくてはなりません。」^(註9)

「私自身のうちらも変わってきました。ある種の崩落のようなものが感じられます。こうありたいという意図はいつの間にか遠くなり、肩に入っていた無用な力は少しずつ消えていったように思えます。」「森をつくる」ということは、この場をあるがままにし、みつづけるということであるように思われます。」^(註10)

などでしょうか。わたし同様、共生園の造園に参加してきた山内君も、シンポジウムの発表で、「たしかに共生園はひとつのあり方をしてはいますが、様々に読み替えられうるものとしてのひとつなのです。…少なくともわたしは、あの場所をひとつの意味や価値に向けて集約しようとは思わないということを強調しておきたいと思います。」と述べ、「ここで改めて作業員として、また多少とも庭に関わるものとして何かできることがあるなら、焦点が定められない場所を作ること、なるべく意味の集約されていない、そしていたる所で躓きしくじることのできる場所を作ることなのかもしれません。」^(註11)と結んでいます。あまりに似た言葉であることに驚きました。ひとつの場所にかかわり、長い時間の作業を通してそこの変化を見続けるとこういう気持ちになり、こういう考えに至るものなののでしょうか。ともかく、彼の発表を聞きながら、へんな安心感のようなものを感じたのでした。

何かの目的にこの共生園を収斂させようとするとおそらくつぎつぎと目的とのズレが生じ不満が増すこととなります。利用を考えはじめるとこの場の豊かさが薄くなって失われるように思え、あるがままのこの場所を見続けることはできなくなるように思います。これらのことは、「この森」をどう使うかというように、環境共生園として位置付け、その意義や活用法を定めて、限定的にとらえていこうとすること、そのことに矛盾があり、無理があるということを示します。いったい、わたしたちはこの場所にどういう役回りをやらせようとしていたのでしょうか。まして、そこでの教育に考えを向かわせようとする、現行の教育を疑い今の自分のあり方を疑うことまでが必須となるでしょう。現在のわたしひとりには荷が重過ぎる内容を含みはじめたようです。とうとうS先生までがわたしの意識の上に登場してきたのでした。どうやらわたしはこの共生園から距離を置かなくてはなりません。

森に話を戻しますが、今では「この森」を大学全体の空間にまで広げてとらえることが必要なのではないかと考えるようになりました。

わたしが赴任した頃のこと、毎日のように構内をうろうろしては、なんと見事な樹木が沢山あるのだろうと感心しながら新しい眺めを楽しんでいました。それほど、普通の街並みを相手にしてきた植木屋の眼には、この大学はすばらしい条件をいくつも備えているように思えました。

ある日、いつものようにつぎつぎと木を見上げながら歩いていると、脇から老人に「あの桜の木はどこにあるのだろう。」と呼び止められました。その人からは既に疲れと落胆が見て取れるようでした。それでもわかには意味が汲めなかったので、一緒に座ってしばし話をしました。彼はこの地で軍隊にあったそうですが、その時の仲間は戦争で大勢が戦死し、生きのびた自分もじきに迎えが来るだろうといった趣旨だったかと思います。若いときに皆と見上げたすばらしい桜をもう一度眺めようと捜していたのです。付き合っただけですが、彼の内にある満開のその桜を見つけることはできませんでした。

大学に現在ある樹木がこの地が経てきた時間と大きな関係があることは言うまでもないでしょう。その辺りをさきほど引用した武蔵野氏の論文をガイドに見ておこうと思います。

「ここは第二次大戦終了までは軍用地で歩兵第九聯隊の営舎があった。構内中央に位置する広いグラウンドはかつての練兵場であった。戦後、合衆国駐留軍に接収された後、1957年（昭和32年）に京都学芸大学が京都市北区のキャンパスから移って現在に至っている。大学は当初からグラウンドを含め旧陸軍の施設を利用してきており、聯隊司令部の建物も一部が職員会館として残され利用されている。学内に見られるクスノキやイチョウなどの大木は戦中からの樹木と思われるが、そのほかにも多くの樹木が繁茂し、緑色濃い構内となっている。これは、農業や生物学分野の教員の一方ならぬ努力により、植栽が長期にわたって続けられてきた結果である。とりわけ農林省林業試験場関西支場（現独立行政法人森林総合研究所関西支所）がキャンパスの近隣にあったことから、多くの樹木の提供を受けることが出来たことも樹木の多い理由となっている。」^(註12)

生物学分野の坂東忠司氏から借りた資料からも当時の様子が見えてきます。例えば1989年の土倉亮一・田淵春三・坂東忠司・田中 徹による『教材用植物と名札の目録 木本（I）』には次のような記述があり、熱意を持って植栽が進められたことがわかります。

「本学においても観察園あるいは農場などの整備がなされているが、特に大学構内の樹木を教材用に整備していくという計画が、大学の移転当初から進められ、植物学担当の永友勇教授を中心に植栽が実践されてきた。それらの大木には木製の名札が付され、解説も記された。筆者らも野外調査において採取した樹木の苗木やいくつかの研究機関から分与を願った苗木の移植に努め、また、学棟新営後の緑化樹の購入などによって、植栽樹種の数は約383種（土倉ら、1984）である。10 cmあるいは1 m程度の苗木として植えられたものの中には15～20 mの高木に生育している樹木が数多く見受けられる。これらの木本約200種に名札（20×30 cm）を付けており、観察者の学習に効果を挙げていることは確かである。」^(註13)

また、1993年の土倉亮一・坂東忠司・田淵春三・沢田誠二の『身近な生物の教材化に関する研究—藤森構内の薬用植物—』にも教材開発として調査・植栽に取り組んだことが記されています。

「本学環境教育実践センター構内(元実験農場)に植栽される木本類の種の数約 220 種(田淵・梁川, 1980), 藤森構内に生育する野草および樹木類は約 880 種(土倉・田淵・田中, 1984)が認められ、いずれも貴重な教材である。植物はできるだけ自然の形で学習に供することが望ましい。しかし、野生の草本が観察や収穫を目的とした栽培植物の中に混生すると、それが有用植物であっても、すべて雑草であるとされる。…」^(註14)

とあり、なんとなく当時の苦勞も見え隠れします。

大学の木が今の姿まで成長したのは、陸軍があったときから、大学の移転期、学舎新設期を通して、そこに注がれた多くのまなざしを受けてであることがわかります。特に、大学環境の重要性を痛感し、その整備に全力で取り組んだ数人の人たちの、喜びを持って見上げるまなざしを感じます。この大学が、現在持ち得ている木々の姿にはそうした人たちの想いが重なっているということを思わずにはいられません。

国立大学法人化に先立ち、2003 年度、大学の資産確定作業の準備段階として立木竹調査が行われています。理学科坂東忠司氏とその研究室のメンバーを核として進められました。わたしも研究室のメンバーと共に参加しています。調査の内容は実に単純で、学内に生息するすべての立ち木を特定し、1本ずつ手仕事で直径を計測しつつ、図面上に記録する。藤森地区を例に挙げますと、全敷地を A から L まで 12 に区分けし、その区画ごとに図面を作り、樹木の位置を番号で記入し、同時に番号順に名称と直径を表にしていくというものでした。今手元の、当時作成した樹木リストをひろげ、その数字だけを拾いあげて集計してみますと、藤森地区だけで約 2500。第二学舎、桃山地区、特別支援学校、京都地区、外国人宿舎の樹木数を加えますと 6000 を大きく超える数になります。このリストには直径を測ることができ、その場に残すことができると考える立ち木のみにして、明らかに無い方が良いというものは記入してありません。また、リストを注意してみると、サツキやツツジ、ウツギ等は 2, 30 本の株の寄せ植えをまとめて 1 と数え記入してありますので、実際はもっと大きな数になるでしょう。大学の規模から考えますと十分な数だと思われます。しかもその中には一抱え以上もある大木が数多く含まれているのです。この調査を基にして確定された立木竹の評価額は 2 億 6000 万円余り^(註15)であるとされています。この額が妥当かどうかということはわたしには全く判断の外ですが、とにかくすばらしい緑の環境を持っているということがあらためて確認されました。わたしたちは魅力的な緑の財産を受け継いでいるのでした。

本題に入らなくてはなりません。大学全体の植栽計画を立てる必要があるということです。わたしたちにもたらされたこの緑を次の世代に渡すためにも、大学の将来の姿を想定し、それを方針として、それに向けて具体的の方策を実行する、そのための植栽計画です。

もうかなり前のことになりますが、わたしが赴任して数年経った頃、ある日出勤すると 2 号館周辺の立ち木が、広い範囲にわたってズタズタにされているのに出会いました。そこは、アラカシを中心にした美しい森が形成されており、少し鬱蒼とはしているが、音楽科がある場所としては実に適切だと気に入っていた場所であったのです。それが 1 日でなくなっている。わたしには何がどうなったのか理解できませんでした。聞けば、外灯が道に当たらず暗くて、犯罪者が潜んでいるようで怖いから…ということです。ますます合点がいきません。理由と結果

が大きくずれています。この場所には適切な剪定が必要だったのです。が、実際にその森におきたことは、意味の無い破壊でした。私にはそう思えます。カシもサクラもエノキもすべての枝を中頃で、クレーンとチェーンソーを使って切って落としてある。今から庭ごとこの建物を取り壊すというのであれば納得がいくやり方です。これが剪定であるとしても方法の選択を間違っています。本来ならば、下草である笹を刈り取り、サクラは不要な枝を付け根から何本か落とし、カシは下枝を整理して上方は枝を間引くといったところでしょう。エノキは下のほうに枝はないのですから手をつける必要はなかったと思います。これで充分施主の要望に応えられますし、木々の姿も美しく残ったでしょう。しかし実際は、先人が思いを寄せてここまで作り上げてきたものを一瞬にして打ち壊してしまった。その後、この森が形を回復するのに5年を要しています。選んだ業者に技術が無かったと言ってしまえばそれまでなのですが、そこに発注した側にもこの場所の魅力を感じる力が欠けています。だから、結果がどうなるのかということに気を留めることなく依頼し手を下します。かつて植栽を進めた人の思いは伝わらなくなっていたということなのでしょう。

このあたりの事情は今も同様です。いやもっと厳しくなっているかもしれない。近隣から苦情が来た、落葉が屋根に積る、外灯が枝で隠された、などなど。そのたびに目先の対応をくりかえし、木を切らざるを得なくなっています。環境WGで意見を述べるからでしょうか、それとも少し腕のいい安価な作庭グループを紹介したからでしょうか、最近はこのよう事案があるたびに坂東か岩村に連絡があり、意見を求められるようになりました。人の生活からの要請と庭の美しさを保とうとする思い、その間でバランスをとるのが作庭の眼と技術です。ふたりで考えをまとめ、適切な対処方法だと思うものを意見として返すようにしています。が、これではやはり対症療法です。根本的に対応するための展望が欠けています。それにこの奇妙な方法では早晚成り立たなくなるのは目に見えています。

また、法人化後つぎつぎと実施された耐震改修工事や図書館と事務棟をつなぐ増設工事などによって、大量の植物が伐採され大きなケヤキやクスノキもいくつか姿を消しました。その周辺の木々も根元を掘り返されたり機械に枝を折られたりと、大きなダメージを受けています。この一連の工事は大学の将来にとっても必要なことなのでしょうから、仕方がないことなのですが、その後の回復に関する事柄は通常工事の計画には含まれないものです。早急に対応しなくてはなりません。ここにも展望が必要になるでしょう。大学の樹木の将来像を視野に入れた植栽計画を策定する時期にきています。

大学に職を得てから、大学の植栽のことが気になるようになりました。なんらかの機会に他大学を訪問するたびに、その大学の木々を見て回ります。歴史のある大学には必ずと言っていいほど大きな木が立っています。今の社会においておそらく大学ほどこのことが可能な条件を備えている場所はないのかもしれませんが。この財産を活用していく、その点では武蔵野氏のオープン・エア・ミュージアム構想に賛同しています。しかしこのまま現状を引きずるのであれば、構想はしばんでいくように思えてなりません。

由緒ある木や高価な石材を並べて庭にしようとしています。そういう庭のなんと多いことか。まるで資産目録のようです。当然のことですがそれだけでは庭の魅力にはつながりません。本当に庭をひとつの装置としてその機能を発揮させようとするなら、価格や価値は忘れて、材料の

ひとつひとつを配置しその間をつなげて、全体でひとつの立体的な空間を作ることが重要なのです。わたしたちも先に述べたように大きな木を何本も受け継いでいます。これらの材料を基にして、ひとつの風景を生み出さなくてはなりません。これはなかなか難しく、力のいることです。他の大学を見ても、あまり成功した例にぶつかりません。技術のない業者に台無しにされた例に多く出会います。たしかに大きな木はいくつも見られるのですが、全体としては建物の横に並んだ平板なつくりになっていることが多い。ないしは、それぞれの部分はちゃんと整備されているのだけれど、全体としてみるとちぐはぐで、散漫な印象になっている。大学全体を見渡したとき、人に伝わるひとつの景観をつくり上げることが大切です。そのためのヴィジョン、計画が必要なのです。

自然の下で、木が持つようになる本来の樹形を活かした、明るい森。大学の多様性を持つ思索の上に、大きく腕をひろげる森。この森の提案をわたしに課された「この森との関わりで成り立っていく教育」に対する当面の回答にしておこうと考えます。



定植されたアスナロ

註

- (1) 岩村伸一 (2007) 『作庭実習「森をつくる」6 環境共生園について (1)』京都教育大学環境教育研究年報第 15 号, 岩村伸一 (2009) 『作庭実習「森をつくる」9 環境共生園について (3)』京都教育大学環境教育研究年報第 17 号は, それぞれこの場所に関することから書き起こされています。
- (2) 『環境教育実践センター公開シンポジウム報告書: 場所から学ぶ—環境教育実践センターをキーステーションにして—』(2009) 京都教育大学附属環境教育実践センター。
- (3) 『環境教育シンポジウム報告: 環境共生園をキーステーションにして—環境教育を学習から日常活動へ—』(1999) 京都教育大学附属環境教育実践センター を参照してください。
- (4) 岩村伸一 (2008) 『作庭実習「森をつくる」7 環境共生園について (2)』京都教育大学環境教育研究年報第 16 号 p.129.
- (5) 『作庭実習「森をつくる」7 環境共生園について (2)』 p.117.
- (6) 『作庭実習「森をつくる」6 環境共生園について (1)』 p.86, p.91.
- (7) 武蔵野 實 (2006) 『京都教育大学野外博物館—オープン・エア・ミュージアム—』滋賀大学環境総合研究センター研究年報 Vol.3 p.7.
- (8) 『作庭実習「森をつくる」6 環境共生園について (1)』 p.97, p.98.
- (9) 『作庭実習「森をつくる」7 環境共生園について (2)』 p.127, p.129.
- (10) 『作庭実習「森をつくる」9 環境共生園について (3)』 p.129.
- (11) 『環境教育実践センター公開シンポジウム報告書: 場所から学ぶ—環境教育実践センターをキーステーションにして—』 p.6, p.8.
- (12) 武蔵野 實 (2006) 『京都教育大学野外博物館—オープン・エア・ミュージアム—』 p.3.
- (13) 土倉亮一・田渕春三・坂東忠司・田中 徹 (1989) 『教材用植物と名札の目録 木本 (I)』京都教育大学理科教育研究年報 Vol19 p.79.
- (14) 土倉亮一・坂東忠司・田渕春三・沢田誠二 (1993) 『身近な生物の教材化に関する研究—藤森構内の薬用植物—』京都教育大学環境教育研究年報第 1 号 p.113.
- (15) 武蔵野 實 (2006) 『京都教育大学野外博物館—オープン・エア・ミュージアム—』 p.3.